

THE INSTRUMENTS

カナディアン ルミアーズ紀行

究極のウッド・トーンを求めて

良質なギター木材の産地として知られるカナダ。カナダ産のアコースティック・ギターと言えば、ラビビー、ゴダンが世界的に有名だが、通なアコギ・ファンの間では、マーク・ベネトー、ユースケ・カワカミなど、個人工房で作られるギターの人気徐徐に高まっている。本特集は、そんなカナダに製作拠点を置く4人のルミアーズのもとを訪ね、カナディアン・アコースティックの“過去”と“未来”をひも解く。

取材／文：長谷鉄弘
撮影：三好智之（人物・工房）／星野俊（ギター）
協力：Ebisu-45（本特集に掲載されているギターの問い合わせは、
エビス45 ☎03-5428-4445まで）

© Introduction

カナディアン・スチール弦アコースティックの現在

～新世代ルシアーの工房を訪ねて～



オープン・マインドな移民の国

カナディアン・ロッキーに代表されるスケールの大きい山岳地帯、手つかずの広大な森林に巨木が自生する中西部の国立自然公園、オーロラや固有の生態系を観察することができる北極圏、バンクーバー、トロント、オタワを始めとするエキゾチック、かつコスモポリタンな都市といった数々の観光資源を誇るカナダは近年、日本人の間でも最も人気が高い海外旅行先のひとつになっている。南・西端にて国境を接するアメリカ合衆国と同じく欧州(おもにイギリス、フランス)からの移住者により16世紀以降に“開拓”されたこの国は、その後も多くの移民を受け入れてきた歴史を持ち、今日ではヨーロッパ系、アフリカ系、アジア系、ヒスパニック系、中東系、そしてモンゴロイド系先住民といった多彩な人種が暮らす“坩堝”の様相を呈している。そのため、多くの住人は肌の色を始めとする外見が異なる他者に対しても友好的で、寛容な態度を見せる。

旅人にとってこのような土地であるカナダは、アコースティック・ギターの産地としてもよく知られている。1970年代末にロバート・ゴダンが興した工房を起源に持つゴダン・グループは現在、モントリオールやケベックの拠点からハイエンドラインに加え、アート&ルシアー～サイモン&パトリック・ブランドのもとコストパフォーマンスに優れたギターをも大量に出荷する巨大メーカーに成長し、その製品は日本の市場にも浸透している。彼らがハイクオリティな楽器を安価にて供給できる背景にはメイプル、シトカスプルース、シダーを始めとする国産材を積極的に用いることで輸送コストを削減するという企業努力が存在しており、この点で彼らが製作するギターはカナディアン・メーカーの内情を端的に表わしていると言える。

カナダのビルダー／ルシアー事情

また、伝統的にDIY／木工が盛んな国柄を持ち、アメリカの流行からやや距離を置いた独自のミュージック・シーンを築き上げてきたカナダには、ゴダン・グループのような量産メーカーだけでなく個人で工房を構えるアコースティック・ギター・ビルダー／ルシアー

Larrivée L-78 Presentation

独自のデザインと設計、厳選された材、エキゾチックなセンスを持つインレイといった個性を武器に、1980～90年代のアコースティック・ギター・シーンに“第三の極”を示してみせたラリビー。その主宰者であるジョン・ラリビーの理念はリンダ・マンザー、ウィリアム・ラスキン、サーゲイ・デヤング、ロブ・ブストス、ジェフ・シガソン、川上祐介を始めとする多くの後進ビルダーたちに継承された。写真のモデルは、1970年代に製作されたもので、彼の真骨頂である精密なインレイが随所に見られる。

も数多く存在する。ジェイムズ・ダキストが晩年に試みたデザインから強い影響を受けつつも、それを一層、モダンに昇華させたアーチトップ・ギターを製作することで有名なリンダ・マンザー（トロント）、ルネサンス期の宗教画を思わせる華麗、かつ精緻なインレイを多彩な素材を用いて楽器に施すことで知られるウィリアム・グリット・ラスキン（トロント）、エキゾチック・ウッドを贅沢に用いた個性的な作風が近年、高い評価を受けつつあるサーゲイ・デ・ヤング（ケベック）ら、日本の市場でもその名を耳にすることが多いビルダーたちがかの地にはおり、今日も彼らのあとを追う若者たちが次々に新しい工房を立ち上げている。

こうしたカナダ在住の個人ビルダーたちに多大な影響を与えた先駆者である、ジョン・ラリビー率いるラリビー（発祥はトロント。のちにバンクーバーへ移転）のことも忘れるわけにはいかない。60年代末に創設され、トラッドとモダンを融合した独自のボディスタイルと設計、エキゾチックなセンスを持つインレイを備える楽器を世に送り出してきた同ブランドは、90年代前半～半ばにかけて日本で起こった手アコースティック・ギター・ブームの火つけ役の一端を担った。その後、工房の規模を拡大し、より多くのギターを生産するようになった同社は、アメリカの老舗量産メーカーほどではないが、純粋な個人ビルダーよりも格段に多くの楽器を供給する“中堅メーカー”へと成長し、ギブソン、マーティンとは異なる“第三の極”をシーンに提示してみせた点で、現在ではその功績をローデン、テイラー、サンタクルーズ、コリンズなどのブランドと同列に語られる存在となっている。

ラリビーに学んだビルダーたち

そうしたビジネス寄りの話を脇に置き、純粋に木工職人／ギター・デザイナーとしてのジョン・ラリビーにスポットを当てても、その影響力は絶大なものがある。前述したリンダ、ウィリアム、サーゲイの3人がいずれもラリビーで一時期、働いた経験を持つ“同窓生”であることはすでに多くの読者もご存知と思われるが、今回取材した4人のビルダーのうちマーク・ベネトーを除く3人もまた同社の関係者だった。ノース・バンクーバーに工房を構え、数10人の職人により運営されていた90年代後半までのラリビーは、若いビルダーを発掘し、育成するトレーニング・センターとしての役割を期せずとも果たしていたのである。

今回、取材することができた3人のラリビー出身者……ロブ・ブストス（パラゴン・ギターズ）、ジェフ・シガーソン、川上祐介……は、インタビューの端々でそれぞれの言葉を用い、ジョン・ラリビーから受けた影響についてオープンに語ってくれた。その中で印象的だったのは、3人ともがラリビー・ギターの設計や製作手法から影響を受けたというよりも、ジョン・ラリビーの生き方や、そのアティテュードに学ぶことが多かったという趣旨の発言をした点だ。トラディショナルなアメリカン・スチール・ストリングス・アコースティックの良さを研究し、多くを学びながらも決してそれらの“コピー”に終わることなく、独自の設計や工法を開発し続ける。そして、自らが理想とするギターを製作するためにはオーソリティによって“良い”と認められた“枯れた技術”とは異なる、前衛的な工法を取り入れることも恐れない……。こうした探求心やチャレンジング・スピリットこそジョンから学んだことであると、彼らは一様に語るのである。ジョンが意図してか、意図せずにか蒔いた種は、ラリビーから枝分かれしたその先で確実に実を結びつつあった。

受け継がれた“フロンティア・スピリット”

このように、豊富な木材資源と弦楽器製作に適した気候をバックグラウンドに持つカナダ在住の個人ビルダーたちは、スチール・ストリングス・アコースティック発祥の地であるアメリカから少し離れたところにいるがゆえに、それらと適度な距離を保ちながら伸び伸びと自らの個性を発揮しているように見える。カナディアン・アコースティック・ギターの魅力は、ひと言で表現すればトラディショナルなスタイルとモダンなスタイルとがバランス良く同居しているところにある。そうした大きな潮流を幹として、各ビルダーが自らのやり方を誇りをもって追求し、伸びた枝葉の先に多彩な色合いを備えた果実をつけているさまを、私たちは今回の取材で見ることができた。

また、そのようなカナディアン・アコースティックの魅力の根底には、比較的歴史が浅い移民の国に暮らす人々のオープンな姿勢や、常に新しい何かをクリエイトしようとする探求心が受け継がれていることも確認することができた。カナディアン・ビルダーたちに見出される進取の気風は、カナダという国と住人が伝統的に培ってきた“フロンティア・スピリット”の上に成り立っているのだからである。





Yusuke Kawakami ユースケ・カワカミ

ベーシックなツールを使いこなすことが僕は重要だと思う。
手作業だからこそ、木を“感じる”ことができます。

大きな野心を抱き、カナダへ

現在、日本から遠く離れた異国の地で個人ビルダーとして活動する川上祐介は、読者の皆さんも御存知のように、もとK.Y.イリのチーフクラフツマンであり、今日も個人の名のもとにリッチー・ブラックモアを始めとするトップ・プレイヤーのためにギターを製作し続けている川上秀穂の子息である。こう聞くと、さぞかし子供の頃からギター漬け〜木工漬けの生活を送ってきた“サラブレッド／エリート”なのだろうと思われる方も多いかもしれないが、現実はまだもう少し複雑だ。少年時代の祐介は意外なことに、職人である父に対して嫌悪感すら抱いていたという。

“中学生の頃まではオヤジの仕事が好きじゃなかったんですよ。当時のオヤジは典型的な仕事人間で、休日に遊びに連れて行ってくれることもほとんどなかったです。また、当時は日

本がパブル景気に湧いていた時代で、「スーツを着て出張に行くお父さんがカッコいい」みたいな風潮があったじゃないですか。ところが僕のオヤジはブルーカラーで、いつも作業服を着ていて、手が汚い。そんな姿をカッコ悪いとさえ思っていました。……僕が楽器製作を真剣に志すようになったのは、大学を出てサラリーマンとして働いていた時だったんですが、その意思を伝えた時もオヤジには反対されたんですよ……「サラリーマンを続けろ」とね。でも僕は、その言葉を聞いて余計にオヤジに対する反抗心を燃やし、「いつか、絶対にモノにしてやる!」という思いから木工技術を本格的に学び始めた。今は僕がカナダに移住したこともあって、オヤジとはいい距離感を保ってつき合えるようになりましたが、以前は本当に喧嘩ばかりしていたんです(笑)”と祐介は告白する。

このように父への強い反抗心を抱えながらも、父と同じ仕事を目指すようになった祐介に

とって大きな転機となったのは、ある日本の音楽雑誌に掲載されたラリービー社の工房訪問記だった。96年、この記事を見て“こんなところで楽器を作れたらいいな”と考えた祐介は、すぐにアクションを起こす。同年、自作のウクレレを携えて単身、バンクーバーに渡り、同社の門を叩いた彼は、幸運にも当時、新たにウクレレラインを立ち上げようとしていたジョン・ラリービーの目に止まり、その工房で3ヵ月間の研修を受ける機会を得る。そして99年、ワーキング・ホリデービザを取得して再びカナダに渡った祐介は、社員として1年間、ラリービーで仕事をするようになる。

この頃、すでに“日本では入手が難しい最高の材を使って、日本より楽器作りに適した気候のもと、海外のビルダーたちと同じ土俵で腕を競いたい”との思いを確かなものにしていた彼は、カナダの地で個人ビルダーとして開業するという野心を抱き、動き始めていた。1日で70本ものギターにフレットングを行なう彼の精力的



1.工具が整然と壁にかけられた工房内。2.工房外観。3.日本製のカナナを調整する。4.“日本では入手が難しい良い材を使ってギターを作りたい”というのが祐介がカナダに移住した動機のひとつだった。手前はレア材として知られるキューバン・マホガニーで、下の巨大なブロックはホンジュラス・マホガニー。ワシントン条約により取引が規制されているブラジリアン・ローズウッドを用いたギターも、もちろん法的にクリアな状態にして出荷している。5.製作中のサイドはマダガスカル(外側)／インディアン(内側)の各ローズウッドをエポキシ・ボンドで貼り合わせたレイヤード・スタイル。アームレストのベースとなる部分は別材のブロックを貼るのではなく、ホンジュラス・マホガニーのライニングを幅広にすることで製作する。6.ニカワの粘りを確認する。部位に応じてエポキシ・ボンドやホワイト・ボンドも併用。7.プレッシングはオーソドックスなスキャロップドX。トップ材は最も厚いところ(ブリッジ周辺)で約2.8ミリ、最も薄いところ(外周)で約2.0ミリと緻密に厚さを調整されている。8.アディロンダック・スプルースをタッピングする。

な仕事を見たジョン・ラリビーが、「君が望むなら就労ビザでも永住権でも取得をサポートするよ」と声をかけた時、祐介は将来を見越して永住権をリクエストした。こうして02年、彼はついに独立し、バンクーバーに工房を開設したのである。

木との触れ合いを楽しむ

現在、個人製作家として自身の名のもとに製品を送り出す祐介は、年間に20～24本のギター／ウクレレを製作している。バンクーバー郊外にある彼の工房はまだ新しく、整然と壁に掛けられた工具やテンプレートがビルダーの几帳面な性格を物語っている。ノミ、カナナなどは今も日本製品を愛用し、最終仕上げはそれらを用いて自らの“手”で行なうという。

“ベーシックなツールを使って、手でやるというのは重要だと思うんです。電動シェイパーで一気に削ってしまったら、アフリカン・マホガニーとホンジュラス・マホガニーの硬さの違いが手に伝わって来ないじゃないですか。その材の粘り、密度、硬さ、木目の走り方といったものは手で削らなければわからない。だからこそ、電動シェイ

パーヤルターももちろん使いますが、最後の仕上げは今も手でやっているんです”。

手間を惜しまない作業は必然的にハードワークを強いることになるが、彼はそれを楽しんでいる。

“多くのことを手作業でやるのは大変だけど、そこが一番楽しいところだとも思うんです……木を「感じる」というところがね。キューバン・マホガニーみたいなレアな材が手に入ったとして、シェイパーで一気に削っちゃったらせっかっの木を感じるできないじゃないですか。それはもったいないと思うんですよ”と彼は笑う。

伝統に学びつつ、一方で新しい工法を取り入れることを恐れない柔軟な発想も祐介のギターを特別なものにしていく。取材直前に完成したばかりの2本のモデルも戦前のマーティンD、同OMを強く意識したデザインを持ちながら、部位により厚さを調整したトップ、ハードロック・メイプルとブラジリアン・ローズウッドを貼り合わせたブリッジプレート、アームレストといったモダンな設計を随所に採用されていた。異なる木目を持つローズウッドを貼り合わせた強固なレイヤード・サイドや、用いる部位によって

ニカワ、タイトボンド、エポキシボンドといった複数の接着剤を使い分ける工法も、ギターの構造のうちどの部分がかっちり固め、どの部分をよりフリーに振動させるか”についての独自の見解を表わしている。もちろん木材についての研究も日々、怠らず、時には産地の森に分け入ることもある。

自身を“決して強い人間じゃない”と分析する祐介であるが、言葉も満足に通じない異国の地でゼロからスタートし、楽器製作や木材について学ぶとともに同業者やウッド・サプライヤーとの間に人脈を築き上げ、工房を開くに至ったその背景には、並大抵ではない苦勞があったことだろう。そんな彼の活動を今まで支えてきたのは、音楽と楽器へのシンプルな“愛”である。祐介は言う。

“ギターを探求する僕の旅はまだ始まったばかりで、今後、やってみたいプロジェクトもたくさんあります。ジェフやロブら同世代のビルダーと刺激し合って、先人が築いた伝統に敬意を表しつつ、新たな方法論を探っていきたい。カナダという国、そしてここに住む人々が、フロンティアスピリットを受け継いできたように……”。



Yusuke Kawakami

見えない部分にまで貫かれた ディテールへのこだわり

今日、ボディ・サイズにトラッドD、トラッドOM、OM、NW（ニュー・ウェーブ・ドレッドノート）、SJ（スモール・ジャンボ）をそろえる川上祐介は、トラディショナルなデザインの中にモダンな構造・設計を取り入れる作風で知られ、写真のトラッドDもスクエア・ヘッド、ヘリンボーン・トリムといったゴールデン・エラ・マーティンを彷彿させる外観の中に、独自の工法を用いて製作されるアームレストを始めとするモダンな要素を盛り込まれている。経年による各部の変形を徹底的に排除するというビルダーの意思は剛性の高い1ピース・ホンジュラス・マホガニー・ネック、トラスロッド溝の左右に埋め込まれる指板エンド部にまで至るカーボンファイバーの補強材（今後はアイアンのTバーも導入予定）、エポキシ・ボンドにより接着されるエボニー指板、ハードロック・メイプルとブラジリアン・ローズウッドをラミネートしたブリッジ・プレートといった細部に表わされており、部位により厚みを調整されたトップと頑強なボディ・サイドの組み合わせはクリア、かつ高次倍音の豊富なトーンを生み出す。

Trad- Dreadnought Style 7

SPECIFICATIONS

- ボディ・トップ: アディロンダック・スプルース
- ボディ・サイド&バック: マダガスカル・ローズウッド
- ネック: ホンジュラス・マホガニー
- 指板: エボニー
- ブリッジ: エボニー
- 価格: オープン (実勢販売価格 888,000円)





1. シトカ・スプルース・ログの前に立つボウリバー社長:Metske Elgersma(左)とトーンウッドのスペシャリスト:David Nadin(右)。
2. 切り出された材。国産材であるシトカ・スプルース、ルッツ・スプルース、ウェスタン・レッド・シダー、ビッグ・リーフ・メイプルなどが見られた。
3. 楽器用に加工された材。ブラジリアン・ローズウッド、フィギュアード・コア、ニューギニア・ウォルナットなどが展示されていた。

カナダの木材事情

ハイグレードなトーン・ウッドが自生する“森林の国”

カナダと言えば“森林の国”という印象を抱く日本人は多い。実際、北緯45度付近から北極圏に至る総面積約998万5,000平方キロメートルの広大な国土を誇る同国には、西部のクイーン・シャーロット諸島やカナディアン・ロッキー山麓、国立公園が密集する内陸部、オンタリオ〜ケベックの東部2州に跨がるハドソン湾周辺を始めとする世界でも有数の木材産地があり、自生する樹木のバリエーションも広葉樹から針葉樹まで多岐にわたる。

もともと、アコースティック・ギター用材の分野で見れば、国旗にもあしらわれ、カナダの森を象徴する存在であるメイプルは、フラットトップ・ギターのサイド&バックに用いられる機会がローズウッドやマホガニーといった“南洋材”に比べて少なく(一方、アーチトップのほとんどはメイプル・サイド&バックを備える)、トップ材のスプルースにおいても、高級ハンドメイド・ギターをオーダーする顧客がヨーロッパを好むことが多いという傾向はある。しかし、シトカ、イングルマンの各種スプルースに目を向ければ、カナダの森は世界でも群を抜く生産量を誇っており、ビンテージ・マーティンのトップやプレイスの材として有名なアディロンダック種も、ニューファ

ンドランド地方において寒冷な気候のもと長い年月をかけて成長した、トップ・グレードに属する材を見ることが出来る。これらに加え、カナダの材木業者はスパニッシュ・ギターに多用されるウェスタン・レッド・シダー、高級エレクトリック・ギター製作家が好むフレム／フィギュアード・メイプルなどの豊富な国産材を、赤道周辺地域の業者が所蔵する木材と好条件にてトレードすることにより、前述した南洋材(エキゾチック・ウッド)についてもグレードの高いものを集積することができるのだという。

また、伝統的にDIYが盛んな国柄から木材に携わる加工業者／トレーダーも各地に存在するため、日本には板状の汎用品に切り出され出荷される材も、カナダではログ(丸太)の状態から楽器専用加工されたものを選ぶことが可能だ。今回、訪れた“ボウリバー”のショップでも、樹齢500〜600年と推定されるシトカ・スプルースのログを加工する現場を見ることができたが、楽器用材ではチェーンソーを用いて輪切りにしたのちに、手斧を使って木目に逆らわずに“割る”という伝統的、かつ手間のかかる工法が用いられていた。これは、切り出された材の小口の木目をストレートに保つための工

夫である。

また近年、注目を集めているルッツ・スプルースのように、これまであまり楽器製作には用いられてこなかった材もカナダには豊富に眠っている。同地のビルダーにより発掘された材が世界のメーカーのトレンドになる日が、近いうちに来るかもしれない。



ボウリバー・スペシャリティ・ウッズで扱う木材は日本国内でも入手可能です。問い合わせは、ダイヤマーク ☎052-461-3245まで。